

黑  
林  
史

都 惠 司

お笑い番組を馬鹿にするやつは、笑いをとることがどれだけ大変で頭をつかうことが知ってるのか。ただ下ネタに走ればよいてもんじゃない。ただリアクションが取ればよいものでもない。だから、あんたみたいに何にも知らないくせに、がんばって笑いをとっている人の事を馬鹿にするなんてまじありえない。

明菜が中学生の頃の事である。ブログというものが普及してきた。それまでは個人が日記を書くには、ホームページを作ったりしなくてはならず、敷居が少し高かった。ブログはメールアドレスをもっていればほぼ誰でも開設のできるものである。その上、専門的な知識などはほぼ必要なく、タイトルと日記を書いたらボタン一つで投稿ができた。

明菜もブログをやってみようかなと考えていた。まだ中学生だったが、やっている友達もいた。危険性についてはあまり考えたことは無かったが、ニックネームなら大丈夫だと思っていた。とりあえず、どんな感じのブログがあるのだろうと参考になりそうなブログを見て回っていたときである。今日もお笑い番組が面白かったなあ、同じように思っている人の感想が知りたい。その芸人の名前で検索をした。検索オプションなどで設定をすると、一時間以内に更新されたブログなどを探することができる。

そして、明菜はそのブログを見つけた。

『キョーヤのひとり言』

そのブログには貧弱な語彙で明菜の大好きな芸人を貶める言葉が並べられていた。まず最初の一行目が、【あいつ、今日もテレビに出ていやがった】である。結果的に言えば、そこで読むのを止めればよかったのだ。回れ右して、ブラウザを閉じて、電源を切って、歯磨きをして顔を洗って眠れば良かったのだ。そうすれば、平和に過ごせたのに。けれど、明菜はスクロールしてひと文字残らず、すべて読んでしまった。

怒りが腹から込み上げて、頭まで突き抜けた。パソコンの前で怒りにぶるぶる震えていた。幸い、明菜の父は風呂に入っていたし、母はもう眠ってしまっていた。明菜は、まだ先程更新されたばかりのその記事に、ひとつ目のコメントをつけた。怒りにまかせた文章は、明菜が冷静になる間を与えずに投稿された。とにかく、こいつの考えを改めさせなければならない。こんなことを好き勝手言っているはずがない。

【はあ？ てめーが死ねよ】で始まるコメントは、「あきにゃん」というハンドルネームで投稿した。それから、明菜はその芸人の非公式のファンクラブのホームページにある掲示板から、リンクを張った。

「この人、最低です。みんなで、わからせてやりましょう」とコメントを添えた。

これで、皆も考えを改めさせるのに協力してくれるだろう。事実、心強い味方となってくれた。

最終的に熱心なファンとアンチの人が全面戦争となって、ブログのコメント欄は荒れに荒れ、キョーヤに謝罪させることができた。一週間かかったが、明菜は満足した。そしてそれ以降は、

そのブログのことなど受験の忙しさや高校生活の楽しさなどがあってすっかり忘れてしまっていた。それから思い出すのは、自分がちゃんと謝罪させて更生させたという記憶である。少し酷いことを言ってしまったと思うようになったのは、大人になってからだった。

思い出されたのは、今日のお昼前の事だった。思い出したのではなく、思い出された。眠っていた記憶が、思い起こされた。明菜の隣の席の橋本恭也によって。

最初、何のことを言っているのか分からなかった。恭也がコピー機からプリントを取り去って、その場から立ち去り、明菜が自分の原稿の原版をセットしたところで、気がついた。

「へっ？ えっ？ ええーっ！」

へっで思い出し、えっで炎上したブログ名は確かと思考を巡らし、ええーっで確定した。周りの先生が何事かとこちらを見遣る。

「あ。な、なんでもありません。すみません」

うっそ。まじ？ そんな人が隣に座っていたのだと思うと、すごい偶然ってあるものだなと明菜は思った。しかし、それと同時に自分がしたコメントが鮮明に頭に浮かんだ。すっかり忘れていたと思っていたのに。一言目から「死ね」とか書いた気がする。

自分が「あきにゃん」だと他の先生や生徒にばれるともものすごく厄介なことになる。これは脅しておかなければと明菜は考えた。自分の席に戻って、小さなメモに場所を書いた。

〈放課後。社会準備室で〉

メモを受け取った恭也は、小さくうなずいた。

そして放課後。

社会準備室で明菜が待っていると、恭也が来た。

「何の用でしょうか？」

「何の用って……。ブログの事です。本当にあれ、橋本先生が書いたものなの？」

恭也は認めがたいという顔をしていたが、素直にうなずいた。

「そうです。僕が書いてました。若気の至りですよ。青かったんです。世間知らずの高校生だったんです。青二才でした。で、笈先生があきにゃんって正解だったんですか？」

明菜も認めがたいという表情で三秒固まったが、言い逃れても仕方がない。

「そうよ。私、あの芸人大好きだもん。もう死んじゃったけど、今でも大好きなの。だから、あのときは許せなかった。でも少しやりすぎだったかもしれないけどね」

明菜は目を伏せた。謝るべきかしら。でも今さらかなあ。明菜が悩んでいると恭也がハンドルネームで呼んだ。

「あ、そうだ。あきにゃん」

「次にその名前で呼んだら、殺す」

悩んでいたがその悩みはどこかへ飛んで行った。目の笑っていない完璧な笑顔で明菜は言う。恭也の息を飲む音が聞こえた。まだどこか明菜を恨んでいるのかもしれない。でなければわざわざ、あきにゃんなどと呼ぶはずもない。

今の明菜なら、たとえ好きな芸人を否定されたところで、その考えを否定することは無いだろう。上手くスルーできる。ちゃんと、大人になったのだ。

「あのとき、私は謝ってなかった。少なくとも、酷いことを言ったのは確かなのに」

明菜はまっすぐ恭也の目を見て言う。

「だから、ごめんなさい」

「こちらこそ。申し訳なかったと思います」

「それで、このことは絶対に黙っていてほしいんだけど」

「当然です。言いません。言えません。僕のブログはまだあるんですよ。検索さえすれば誰でも見られるんです」

「嘘お！　なんでそんな黒歴史をほったらかしてんのよ。信じらんない」

「戒めです」

「そんなもん無かったって、心の奥深くにしまっとけばいいでしょ！」

「うるさいなあ。笈先生は。僕はあなたの弱みを握っているんですよ？」

「同時に自分も自爆するのは、弱みかしら？」

起爆装置がふたつある、ひとつの爆弾を二人で抱えているようなものだった。

明菜と恭也は指きりげんまんをした。

「ばらしたら、針千本飲ます。絶対にだ」と明菜。

「怖いよ。普段の笈先生はいずこ？」と恭也。

「「指切ったっ」と声を揃えた。いい年した大人なのにまるで小学生のようだった。

「内緒だからねっ。絶対内緒よ！」

約束し終わったときにがらりと扉が開いた。

明菜の正面に座っている同じ社会科の佐竹伸生である。

「……逢引き？」

「「違いますっ」」

二人の声が重なる。明菜は、くるりと伸生に背を向けて恭也に射殺すような視線を向けた。それでいて完璧な笑顔である。この世のものとは思えない恐ろしさだった。

「それじゃあ、橋本先生。例の件よろしく願いいたします」

明菜はそう言うとするりと伸生の隣をすり抜けて、職員室へと戻って行った。

「例の件って？」

「授業内容のことで相談をしていたんです。僕と笈先生はひとクラスだけかぶってますので。似たような内容にしても生徒たちはつまらないと思ったもので。べ、別にやましいことなんてありませんよ」

そう言うと、恭也も伸生の隣をすりりと抜けて、職員室へ戻った。

## 黒歴史

<http://p.booklog.jp/book/33333>

著者：都 恵司

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/123miki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/33333>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/33333>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.